イギリスの歴史家とインド

——十八世紀から十九世紀半ばのインド史をめぐって——

宮原辰夫

一　はじめに
二　フランス知識人の影響
　(一)フランソワ・ベルニエ
　(二)モンテスキュー
三　イギリスの歴史家とインド
　(一)アレクサンダー・ダウ
　(二)ジェームズ・ミル
　(三)マンスチュアート・エルフィンストン
四　結びにかえて

一　はじめに

十五世紀末の「大航海時代」からはじまるヨーロッパの飛躍的な膨張、その中でも、イギリスの膨張は、十七世紀初頭から「二十世紀前半」まで及んで、広大な領域へと拡大し、「七つの海の支配者」として大英帝国を築きあげた。インドもまた、イギリスの大きな膨張の波に呑まれた国の一つであった。インドにおける植民地支配が、本格的に開始されるのは、イギリスが、インド亜大陸の市場や資源や植民地をめぐるフランスとの争いに勝利した、一七五七年のプラッシーの戦い以後のことである。イギリスによるインド亜大陸の経済的・政治的支配が事実上確立されると、インドを目指して、多くの商人や植民地行政官ばかりでなく、旅行家やイエズス会に代表される伝道師などが、それぞれの利害を求めて、植民地インドに向けて航海に旅立った。一方、イギリス国内では、十八世紀後半から十九世紀半ばにかけて、産業革命が興り、それはイギリス社会に「改革の時代」をもたらし、新しい思想によって社会を変えようとしていた。その中心的思想となったのが、アダム・スミスの自由主義経済思想やベンサムの功利主義哲学であったと言える。十九世紀初頭から半ばにかけて、イギリス国内における、こうした自由主義思想の興隆は新興ブルジョアジーのイデオローグとして利用され、イギリスの植民地支配にも大きな影響を与えることになる。

こうした時代思潮とインドにおけるイギリスの植民地支配との関係を、明らかにしようとした研究が、幾人かの歴史家によってなされている。バウルハチェット(Dr. K. A. Ballhatchet)やストークス(Dr. E. Stokes)の著作は、この分野における先駆的な研究業績である。[1] こうした研究は、植民地時代のインド社会およびイギリス社会を明らかにする上で、きわめて重要な問題提起を行なっていると言える。もちろん、当時支配的な思想運動の盛り上がりとイギリスの植民地政策との間に、実際どのような相関関係があるのかを論証することはきわめて難しい。しかし、十八世紀後半のイギリスは、インド亜大陸においてイギリス領インドの基礎を築きはじめており、フランス革命の影響を受

けて、政治的・社会的改革を求める気運は高まりを見せていた。確かに、その反動によって、十八世紀末から十九世紀初頭にかけ、一時イギリスは、保守的・反動的傾向が強かったが、しかし、十九世紀における産業革命の力強い進展、それに伴う新興ブルジョアジーの台頭を背景に、自由主義的思想による改革を求める広範な運動が展開されるようになった。こうした時代背景のなかで、インドに直接かかわっていたイギリスの政治家、政策立案者、知識人、植民地行政官といった人たちが、その時代の支配的イデオロギーと無関係に存在していたとは考えにくい。実際、本稿で、扱うことになるイギリスの歴史家たちが、それぞれインドと重要なかかわりもっ要職に就いていたことからも、それは想像することができる。具体的に述べるならば、アレクサンダー・ダウは、インド駐在の軍人として、ジェームズ・ミルは、東インド会社の通信審査部長の補佐役として、またマンスチュアート・エルフィンストンは、東インド会社の書記官（のちにボンベイ知事）として重要な役職に就いていた。彼らの著した「インドの歴史」のなかに、明きらかに、その時代の支配的な思想や知識（インド観）の影響を見て取ることができる。本稿では触れないが、彼ら以外にも、ジョーンズ（Sir William Jones 1746-94）、コーンウォリス（Charles Cornwallis 1738-1805）、ベンティンク（William Henry Cavendish Bentinck 1774-1839）、ダルハウジー（James Andrew Ramsay Dalhousie 1812-60）といった人たちは、イギリス領インドにおいて、それぞれカルカッタの上級裁判所の裁判官やベンガル総督、インド総督といった要職に就き、その時代思潮に影響されながら、自らの強い信念に従って、インドの植民地支配にあたったと言われている。

本稿では、まず最初に、「科学の時代」と呼ばれた十七世紀の合理主義的傾向の強かったフランスの思想状況のなかで、ガッサンディの経験論的思想を継承し、インドを旅行したフンス知識人大旅行家フランソワ・ベルニエと、その主著『旅行記』を重要な文献史料とし、インドを含むアジア諸国を「専制政体」と規定した啓蒙思想家モンテスキューを取り上げる。そして、彼らがインドをどう描写し、どのように定式化したのかを論述する。次に、これら二人の

フランス知識人によって作り上げられたインド観が、十八世紀から十九世紀にかけて、インドの歴史を叙述したイギリスの歴史家たちにどのような影響を与えたのか。また、それらイギリスの歴史家たちは、自らの歴史書を通して、イギリスの政治家、政策立案者、知識人、植民地行政官、一般大衆をどのように啓蒙しようとし、植民地政策にどのような役割を果たしたかを論述する。

二　フランス知識人の影響

(一)　フランソワ・ベルニエ

ヨーロッパ人のインド観は、インド洋貿易の覇者であったポルトガルが、十七世紀初頭から東方貿易に参入してきたオランダ、イギリス、フランスに取って代わられてから、急速に変化しはじめた。オリエント、インドに向けての大航海には、商人ばかりではなく、旅行家や冒険家、伝道師たちも数多く含まれていた。その結果、十七世紀後半以後のヨーロッパ世界には、旅行家の書き残した旅行記や見聞録、日誌、冒険家の血わき肉踊る冒険譚、船乗りや商人たちの面白い体験談、伝道師の詳細な書簡集などが溢れ返ることになった。つまり、こうした大航海は、ヨーロッパ世界に、香辛料やその他の珍しい物産以外の新たな副産物をもたらしたと言える。エキゾチックなオリエントへの夢を掻き立てる書物や話は、印刷技術の発達によって、次第にヨーロッパの民衆の間にも広がり、多くの読者を虜にした。しかし、旅行家や冒険家によって描かれるインドや、船乗りや商人によって語られるインドと言えば、夫の死とともに寡婦が生きながら焼かれるサティーの因習、幼児婚の風習、奇形児の裸の乞食、カースト制度などと、きわめて偏向したものが多かった。

明らかに、こうした偏向は、先入的偏見からだけでなく、商人や旅行家たちが、直接土着民と接触し、言葉を交わ

すことがきわめて稀であったことを物語っていると言える。[2] なぜなら、彼らのインドの風俗習慣や建造物についての誤った記述からもそれは窺い知ることができる。フォースター（Forster, Sir William, 1863-1951）は、その主著『インド初期旅行記』（*Early Travels in India*, 1583-1619）で、アクバルとジャハーギール皇帝支配期の北西インドを旅行した七人のイギリス人の話をまとめている。[3] フォースターによれば、テリー（Edward Terry）は、ブラーフマン（*Brāhmin*）のシカー（*sikhā*）について信じられない説明をしている。「彼らは通常、マホメットが彼らを天国に召すように王冠の上に巻き毛だけを残して、彼らの頭からすべての髪を剃り落としている」。[4] またウィジントン（Nicholas Withington）は、ジャイナ教はピタゴラスの信奉者だと考えていた。[5] アショーカ王の石柱やその他の石柱は、アレクサンダーが、前三二七年インドの王ポロスと戦って勝利した記念に建てられたものだ説明した。コーリヤット（Thomas Coryat）は、デリーの鉄柱（*Iron Pillar*）の上に刻まされた文字はギリシア語で書かれたものであると確信していた。[6] こうした「誤謬と偏見」による外部観察者（旅行家）の目を通して歪められたインド像は、十七世紀末頃にはヨーロッパ世界に次第に定着していった。もちろん旅行家のなかには、テリーのように、インドに対する誤謬はあったとしても、先入的偏見からではなく共感からインドに関心を抱き、インド文学の偉大さを認め、ムガル帝国の宗教的寛容さを称賛した人たちもいたが、多くの場合、遠く隔たったエキゾチックな国インドといった、ヨーロッパ人の「誤謬と偏見」からくる固定観念から逃れられてはいなかった。[7]

こうしたヨーロッパ人の固定観念から、比較的自由にインドを観察した人物がいた。彼の名前は、フランソワ・ベルニエ（François Bernier 1620-88）である。ベルニエは、天文学や物理学、数学に精通していたばかりか、ガッサンディ（Pierre Gassendi 1592-1655）の哲学に傾倒し、医学まで修めた、まさにその時代の所産とも言える代表的な知識人の一人であった。ベルニエの師、ガッサンディはデュ・ピュイ・アカデミーの思想的なリーダーであり、デカルトに代表される合理主義的傾向の強かった十七世紀のフランスにおいて、デカルトと堂々と論陣をはり、一歩も引

けを取らなかった哲学者・科学者であった。ガッサンディは、デカルトの理性の直覚および演繹法に反対し知覚を出発としようとし、また観念本有説に対し、その経験的起源を主張した。[8] 極論するならば、デカルトの思想を思弁的・演繹的・形而上学的なものとするならば、ガッサンディの思想は、経験的・帰納的・反形而上学的なものであると言える。その意味においては、彼の思想は、十八世紀のイギリス経験論の先駆的役割を果たしているとも言える。こうしたガッサンデイの忠実な弟子の一人であったベルニエが、どうして十三年にも及ぶ「東洋」への大旅行を敢行したかについてはかならずしも明らかではない。しかし、ガッサンデイの思想に影響を受け、ル・グーの『東洋旅行記』に触発されたベルニエが、自らの知的探求心から「東洋」に向けて大旅行に出発した点を疑うことはできない。[9]

ベルニエは、ムガル帝国時代のインドに、一六五九年から六九年まで約十年間滞在した。一六五九年の三月頃、王位継承をめぐる戦争で、アウラングゼーブ軍に追われ、その途中負傷したシャー・ジャハーンの長子ダーラー・シコー(Dārā Shikōh 1615-1659)の妻をアーメダバード付近で治療したことが縁で、ベルニエはダーラーに請われ医者として彼に仕えた。しかし、ダーラーに仕えたのはごく短い期間であったらしい。アウラングゼーブ軍の襲来を恐れて、その地を去ったダーラーのあとの九年余り、ベルニエは哲学者として、アウラングゼーブ帝の高官ダーニシュマンド・カーン(Dānishmand Khān)に雇われることになる。ベルニエは、ダーニシュマンドに仕えるかたわら、バラモン教の学識者(*Bramin pandits*)や上級ムガル官僚と接し、インドの宗教や社会に関する多くの知識を習得し、また膨大な資料を蒐集した。インド滞在中における、こうしたムガル帝国での生活は、ベルニエにとって、皇帝一族の帝位争奪をめぐる内紛に遭遇したり、ムガルの宮廷生活の様子を観察したり、インドの都市や自然、風俗や習慣、文化や宗教を身近に見聞するという稀有な機会を与えられたと言える。[10]

こうして約十年あまりのインド滞在を終えたベルニエは、一六六九年パリに戻ると、自らの体験と知識、そして膨大な資料を基づいて、インドに関する見聞録の執筆に取りかかった。彼は、旺盛な好奇心と批判精神によって、イン

ドを相対主義的な視点から分析しようとした。一六七〇年、第一巻『ムガル帝国で起こった大政変の話』（*Histoire de la dernière révolution des États du Grand Mogal*）が出版され、翌一六七一年には第二巻『ムガル帝国についてのベルニエ氏の覚え書の続編』（*Suite des Mémoires du Sir Bernier, sur l'Empire du Grand Mogal*）が相次いで出版された。ほぼ同時に一六七一年～七二年には、『ベルニエの旅行記』というタイトルで英訳本が出されるなど、次第にヨーロッパにおいてベルニエの名声は高まっていった。[11] ベルニエの『旅行記』が、ヨーロッパの知識人たちにいかに読まれ、影響を与えたかについては、十八世紀から十九世紀のヨーロッパを代表する思想家を幾人か挙げるだけで十分であろう。ヴォルテール（Voltaire,1694-1778）は、『ルイ十四世の世紀』（*Le siècle de Louis XIV*, 1751-56）のなかで、ベルニエの『旅行記』への賛辞を挿入している。[12] 他方、アダム・スミス（Adam Smith 1723-90）は、『国富論』（*The Wealth of Nations*, 1776）のなかで、ベルニエのヒンドスタンの土木事業に関する記述に対して批判的に扱っている。[13] また、カール・マルクス（Karl Marx 1818-83）は、インド論を叙述する際に、このベルニエの『旅行記』を重要な典拠の一つとして引用している。[14] こうした思想家のなかでも、フランスの啓蒙思想家モンテスキューは、後述するように、その主著『法の精神』（*De l'Esprit des Lois*, 1748）において、諸国民の法律制度の発展を自然的・社会的条件と関連させて考察しているが、インドの政体（専制政体）をインドの風土や気候、宗教、気質との関係で言及する際、幾度もベルニエの『旅行記』を援用している。

ベルニエの成し遂げた仕事は、これまでヨーロッパ人の先入的偏見に囚われた風俗習慣に対して鋭い批判精神、反宗教的な態度、冷徹な目で分析を加えたり、ヒンドゥーの神話を相対主義的な視点から纏め上げたという点は評価に値するものである。しかし、インドの政体や土地所有形態についての記述を見る限り、当時ヨーロッパに現われていた新しい思想や重商主義の台頭、資本の蓄積や私有財産権の発達といった時代の制約から必ずしも自由であったとは言いがたい。なぜなら、ルイ十四世に仕えた著名な政治家、コルベール（Jean Baptiste Colbert 1619-83）に宛てた

手紙の中で、私有財産権を擁護するロックの思想的影響が窺われるからである。[15] ベルニエはコルベールにやや皮肉を込めて次のように述べている。「閣下、手短に結論を述べるために、わたしはそれを繰り返さなければなりません。土地の所有権を取り上げなさい。そうすれば、確実に閣下は専制政治、奴隷制、不正義、貧困、暴虐を導入することができます……」。[16] では、ベルニエはインドの政体や土地所有形態についてどのように考察していたのであろうか。ベルニエによれば、インドの政体は、臣下に絶対的権力を行使する気紛れな独裁者とそれに従属する官僚集団によって支配されている。また、インドには、絶対的支配者に挑戦する貴族も財産をもつ階級も全く存在していない。[17] インドを含むアジア諸国が衰退の一途を辿っているのは、明らかに私的所有権が欠落しているためである。[18] こうしたベルニエのインドの政体や土地所有形態についての考察は、マルクスやモンテスキューがアジアの生産様式や政体様式についての概念を構築する際の重要な典拠の一つとして利用されることになる。また、ベルニエの『旅行記』は、十八世紀後半以後、「インド史」を著わしたイギリスの歴史家たちに、知識としての一つのインド観を提示したといえる。

(二) モンテスキュー

今やフランスは、ルイ十四世(Louis XIV, 在位一六四三〜一七一五年)治世下で、アンシャン・レジームと絶対主義の専制支配に陥っていると考えていたモンテスキューは、こうした現状からフランスを救おうとして、専制的な絶対王政に対する最も根源的な批判の書として、『法の精神』を著した。晩年、トルコやペルシアの東洋的専制政治の礼賛者となり、そのためシャー・アッバス大王と呼ばれたルイ十四世は、モンテスキューにとって、まさに東洋的専制主義者の典型と映っていた。その故に、ルイ十四世の専制的絶対王政は、『法の精神』のなかで、あらゆる側面から批判されることになる。それでは、『法の精神』なかで、モンテスキューが叙述している「専制政体」に焦点をあてながら、ほかの二つの政体の本性と原理について簡単に触れることにする。

モンテスキューは、諸国民の法律制度の発展と自然的・社会的条件とを関連させて考察し、諸国家を「共和政体（le REPUBLICAIN）」、「君主政体（le MONARCHIQUE）」、「専制政体（le DESPOTIQUE）」の三つの統治形態をとるものと規定している。それぞれの政体の本性について、モンテスキューは次のように論述している。

「共和政体は、人民が全体として、あるいは人民の一部だけが最高権力をもつところの政体であり、君主政体はただ一人が統治するが、しかし確固たる制定された法律によって統治するところの政体である。これに反して、専制政体においては、ただ一人が、法律も規則もなく、万事を彼の意思と気紛れとによって引きずって行く」[19]

さらに、この三つの政体が、維持または持続されるための原理として、共和政体には「徳（la VERTU）」、君主政体には「名誉（l'HONNEUR）」、専制政体には「恐怖（la CRAINTE）」が必要であると述べている。[20] 三つの政体の本性とその原理の説明において、とりわけ本稿で重要なのは「専制政体」についての記述である。もちろん、「専制政体（*despotism*）」という概念は、モンテスキューによって最初に用いられたわけではない。ヴォルテールが指摘するように、それは十八世紀のヨーロッパで生まれた比較的新しい概念であり、「専制的絶対王政（*tyrannical absolutism*）」を意味するものとして、ミルトンやロック、そしてルイ十四世の支配時代のフランスの著述家たちによってすでに用いられていた。[21] とりわけ、モンテスキューは、ロックの主著『統治論』（*Two Treatises of Government*, 1690）からも、「専制政体」についての着想を得ていたと思われる。[20] モンテスキューの「専制政体」という概念は、フランスを専制主義とアンシャン・レジームから救いだし、新しい自由と平等の社会を建設する必要を訴えるための反面教師として用いられたもので、ヨーロッパの歴史的な理念型を定式化した類型論の一つであると言える。モンテスキューは、この「専制政体」という概念を、「旅行記」などの記述を下に、アジアの政体へと敷衍し、より普遍的な概念として定式

化しようとした。[23] それでは、モンテスキューは「専制政体」をどのようなものとして理解していたのであろうか。『法の精神』の中で記述された内容に触れてみることにする。

モンテスキューによると、「専制政体」の君公（支配者）は、法律や規則など必要なく、万事を自分の意思と気紛れによって執り行なう。人民は、君公から服従を強いられ、奴隷のように扱われ、厳しい刑罰と拷問の下で生きることになる。[24] また君公は、自分がすべての土地の所有者であり、すべての臣民の相続人であると考えるゆえに、人民の財産譲渡などありえず、保証された資産など誰も持たない。[25] さらにモンテスキューは、こうした「専制政体」の例は、アジア（中国・インド・ペルシアなど）では普遍的に見出だすことができる。[26] これは熱い気候条件（風土）のためである。こうした風土の下で、人民は怠惰で、変わりやすい性格を生み出し、太古から存続している風俗習慣に従って生きることになる。インド人は、静止と虚無とがあらゆるものの根底であり、あらゆるものの行きつく究極であると信じている。能動的・活動的であるより受動的・思弁的である。[27] したがって絶対的支配（「専制政体」）に抵抗することなど全く望んでいない。こうしたモンテスキューのインドの政体と風土についての記述は、まさにベルニエが『旅行記』で描写したインドそのものに基づいている。[28] では、この「専制政体」と宗教との関係をモンテスキューはどのように考えていたのであろうか。

モンテスキューによれば、宗教が他のどの「専制政体」におけるよりも影響力をもつ場合、それは恐怖に加えられるもう一つの恐怖である。イスラーム諸国において、人民が君公に対してもつ驚くべき畏敬の念は部分的には宗教に由来している。[29] イスラーム教やヒンドゥー教は、風土に根差している。たとえば不断の沐浴は、熱い風土の下ではきわめて日常的に行なわれる。したがって、イスラームの法やヒンドゥー教では沐浴を命じている。[30] 輪廻の説もインドの風土にふさわしく作られている。[31] 風土の中から生まれた宗教、とりわけイスラーム教は、心の怠惰からマホメット教的な予定説の教義が生じ、この予定説の教義から心の怠惰が生じる。[32] イスラーム教徒は日に五回祈り、その都度こ

の世に属するすべてのものを自分の背後に捨てるための行為をしなければならない。これが彼らを思弁に慣らすのである。[33] つまり、モンテスキューは、「専制政体」はイスラーム教によりよく適合するものと考えていた。[34]

こうして描かれたインド世界を、モンテスキューは、ベルニエ、タヴァルニエ、シャルダンの『旅行記』やイエズス会士の『書簡集』などから推論することによって、東洋全体を一般化し、東洋をこの「専制政体」の典型例として見做していた。[35] たとえルイ十四世の絶対主義的専制支配を批判する根拠として、この「専制政体」という概念を用いたとしても、結果的には、インド観を含む東洋観を固定化する役割を果たしたことは否めない。もちろん、こうした東洋の政体や土地所有形態に関するモンテスキューの考えが、当時支配的であった絶対主義的重商主義者たちに容易に受け入れられる筈もなかった。しかも、アジア文明の礼賛者であったヴォルテールは、モンテスキューの東洋の政体、土地所有形態、宗教についての叙述にはきわめて否定的な立場を示した。[36] しかしながら、モンテスキューの思想は、イギリスの思想家に大きな影響を与えたばかりか、インドの「専制政体」や「土地所有形態」に関する記述は、ベルニエのインドについての考察を、より明確な形で定式化したことで、十八世紀後半以後の「インド史」を著わしたイギリスの歴史家にも大きな影響を与え、一つのインド観を創り上げたといえる。

三　イギリスの歴史家とインド

（一）アレクサンダー・ダウ

ベルニエの『旅行記』は、批判精神、反宗教的な態度、相対主義的な視点から、インドを観察し、自らの体験とそこで習得した知識によって、インド（ムガル帝国）を描こうとしたものであるが、それとは異なる視点から、インドを叙述しようとしたのが、アレクサンダー・ダウ（Alexander Dow 1735-?）の主著『ヒンドスタン史』（*The History*

of Hindostan. 3vols., London, 1768-72) である。彼は、ペルシア語の史料に基づいて、できるだけ忠実にインド（ムガル帝国）の歴史を著そうとした。この『ヒンドスタン史』が出版される頃から、インドのムガル帝国に関する一般的な歴史書の需要が、大英帝国の膨張にともない、次第に高まりつつあった。しかし、それまでは、イギリス人のインドの歴史に関する知識は、専らヨーロッパ人旅行家の見聞録や著名なオリエンタリスト、デルベロ(Barthelemy D' Herbelots 1625-1695) の『東洋事典』(*Bibliotheque Orientale*, 1697)、ペルシア語の史料を基に著された、ジェームズ・フレーザー (James Fraser) の『ナーディル・シャーの歴史』(*The History of Nadir Shah*, 1742) の最初の章などを拠り所としていた。[37] 従って、ダウの『ヒンドスタン史』の登場は、ヨーロッパ人旅行家のインド（ムガル帝国）の文化、風俗習慣、政治一般についての記述が、もはや第二義的な価値しか持たなくなったことを示すこととなった。こうしてダウの『ヒンドスタン史』は、十七世紀～十八世紀のムガル帝国の歴史をカバーする一般的歴史書として、十九世紀の初頭までの半世紀あまり、イギリスのインド・イスラーム史家や著述家によって相応の評価を受けてきた。[38]

ダウの『ヒンドスタン史』は、ペルシア語の史料、インド中世のムスリム諸王国史をまとめたフィリシュタ(Muhammad Qasim Firishta 1570?-1612) の『フィリシュタの歴史』(*Tārīkh-i-Firishta*) を下敷きにしながら、二次資料としてヨーロッパの知識人旅行家の旅行記や見聞録などを十分に参考にしながら、インド・ムスリムに関する最初の一般的歴史書として書かれたものである。[39] その時代の大英帝国とインドとの結ぶつきは、インドの植民地をめぐるフランスとの争いに勝利した、一七五七年のプラッシーの戦い以降、急速に深まり、インドにおける大英帝国の政治的・経済的役割も、それに伴って増大していった。こうした時代状況にもかかわらず、インドの出来事に関して、イギリス本国の知識人や政治家、一般民衆は、相変わらずエキゾチックな興味の域から出ることはなかった。ダウは、『ヒンドスタン史』の序文のはじめに、イギリス人は自分たちの生きている時代や国、政府を好ましいと思っているために、遠い異国の時代についての歴史書を、無価値なものとみなす同国人の「自惚れ」「優越性」「無関心」「偏見」を嘆いて

いる。[40] そして、もはやインドの政治システムばかりでなく、インドの過去についての知識（歴史）なしには、インド植民地において、有効な政策を立案することはできないと考えていたダウは、ムガル帝国の歴史を通しながら、インドの風俗習慣、言語、文化、宗教だけではなく、統治形態を明らかにすることで、インドに対して、大英帝国はいかなる政策を採るべきかを提唱しようとした。それでは、インドの統治形態を、ダウはどのように理解していたのであろうか。

『ヒンドスタン史』の第三巻の中に収められた「ヒンドスタンにおける専制政体の起源と性質に関する論文」（*A Dissertation concerning the Origin and Nature of Despotism in Hindostan*）を読むかぎりでは、ダウはベルニエやモンテスキューの思想に影響を受けていたと言える。ダウによれば、統治機構はその形態を偶然の行為から得ている。つまり、統治機構は民衆の生来の態度からその精神と特質を引き出している。こうした生来の態度は、気候条件や宗教的信仰によって大いに影響され作り上げられる。インドの熱い気候は、土着民を独裁的権力に対して無気力、怠惰で、従順なものにした。[41] 従って、インドの宗教は、イスラームであれヒンドゥー教であれ専制政体を促してきた。とりわけ、ムハンマドの宗教は最初から専制が意図されていた。東方において、こうした専制政体が長い間定着していたのは、イスラームがその最大要因の一つであった。[42]

しかし、ダウは、インドの専制政体は、自由な国（ヨーロッパ）で生まれた人々が想像するほど、他のアジアの国々に比べて、それほど有害なものとはみなしていなかった。[43] むしろ、ムガルの王は寛大で、慈悲深く、人道に適った、魅力ある独裁者であり、それゆえ、二世紀もの間、世界の中でも最も繁栄を誇った帝国をインドにもたらしたのであると考えていた。[44] また、インドには土地の私有権は全く存在していないが、しかし徴税権保有形態であったザミンダーリーの権利によって、その欠落を補いうると考えていた。[45] いずれにしろ、インド・イスラームに焦点をあてた、ダウの『ヒンドスタンの歴史』は、従来のヨーロッパ人のインド観に新たな修正を加えたという点では評価できるもの

であるが、しかしインドの統治形態や土地制度に関する記述を読むかぎりでは、ベルニエやモンテスキューによって、創り出され、ステレオタイプ化されたインド観の枠から離れて、インドの歴史を描くにはいたらなかったと言える。

(二) ジェームズ・ミル

十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、イギリス国内では、自由主義的な「改革」の時代を迎えようとしていた。しかし、後述するように、ナポレオンの大陸封鎖によって、イギリス国内の産業資本家や自由商人、労働者階級は経済的に大きな打撃を受け、きわめて深刻な状態に陥っていた。こうした戦時下において、この経済的窮乏から脱するためには、経済的自由の獲得、とりわけ外国貿易の自由こそが、彼らにとって緊急の課題となっていた。したがって、自由主義的な改革思想は、まさに時代の潮流のように受けとめられていた。しかし、現状は、依然として、地主階級や特権商人の既得権は温存されていたばかりか、フランス革命の影響によって、破壊された伝統的社会秩序の擁護、あるいは、国力の増強を唱えて保守的・反動的な思想も台頭していた。言い換えれば、この時代のイギリスは、地主階級と産業資本家、特権商人と自由商人、保守主義と自由主義との対決の時代でもあった。自由主義的改革運動の思想的中核の一つであったのが、ジェレミ・ベンサム(Jeremy Bentham 1748-1832)の功利主義の哲学であった。ベンサムの思想は、十九世紀初頭のイギリスにおいて、いわゆる哲学的急進派(*Philosophic Radicals*)と呼ばれる人たちによって、選挙法の改正、自由貿易の促進、植民地政策の改善といった実践的な活動を展開し、イギリスの改革に大きな貢献を果たした。

ベンサムの門下であり、哲学的急進派の中心人物であったのが、ジェームズ・ミル(James Mill 1773-1836)であった。彼は哲学者であり、歴史家であり、経済学者でもあった。その各分野において、彼はいくつかの著作を残している。[46] そのなかでも、ジェームズ・ミルを歴史家として有名にしたのが、全六巻からなる『英領インド史』(*The History*

of British India, 1817）である。われわれが興味をそそるのは、『英領インド史』のなかで描かれているインド像である。この歴史書は、十年余りの年月を費やして完成したミルのインドに関する最初の著作である。この歴史書を著すあたって、ミルは、インドに関する膨大な資料を読み解き、長い時間をかけて詳細に検討したと言われている。しかし、ミルのインドに関する興味は、インドへの憧れや純粋にインド文明に対する知的好奇心から起きたわけではなかった。後述するように、インドはあくまでも功利主義や自由主義の思想を実現するのにふさわしい実験の場所とミルはみなしていた。つまり、ミルは、『英領インド史』を著すことによって、インドの社会や文明とイギリスの社会制度や植民地行政を批判し、自らの思想の正当性を明らかにし、その思想の実現をインドやイギリスの社会の中に求めたと言える。ジェームズ・ミルの息子、J・S・ミル（John Stuart Mill 1806-73）は、『自伝』のなかで、父ミルの『英領インド史』について次のように叙述している。「このすばらしい書物から私が受けた多数の新しい考え方、あるいは、ヒンズー側の社会や文明、イギリス側では制度や行政についてこの本の中に見られる批判や考究が私の思想に与えた衝撃、刺激、指導等を考えると、早くこの本になじんだことが、私のその後の進歩にどれだけ役に立ったかわからないといわなければならない」[47]。『英領インド史』のなかで描かれるインド像に触れるまえに、十八世紀末～十九世紀初頭のイギリスの社会情勢について簡単に概観することにする。

十八世紀後半のイギリスは、ジョージ三世（在位一七六〇～一八二〇年）が国王として自ら実権を握り、政権をトーリー党（十七世紀末～一八三〇年、政権担当）に委ねながら、王権の強化とその支配権の拡大（植民地化）を志向する保守的・反動的な時代であった。しかし、十八世紀末～十九世紀初頭にかけて、イギリスはナポレオンとの大陸戦争（Great Continental War 1793-1815）下にあった。その大陸戦争が最高潮に達したとき、ナポレオンによってベルリン宣言（Berlin Decrees 1806.11.21）に始まる、あの歴史上有名な大陸封鎖が断行されると、大陸貿易や植民地貿易の断絶は、イギリスの製造業者や産業資本家、自由商人ばかりか労働者階級にまで致命的な打撃を与えた。こう

した大陸封鎖下のイギリスの現状を看過できなったミルは、『商業擁護論』(*Commerce Defended* 1808)を著し、アダム・スミスの自由貿易論を支持し、東インド会社に象徴されるような独占的保護貿易を批判し攻撃したばかりか、産業資本の資本蓄積の立場から地主階級の存在を鋭く批判し、近代的な自由商業を擁護する立場を明らかにした。[48] インド貿易独占権は、産業革命の嵐のただ中、一八一四年四月一日以降、ついに撤廃されることになる。

こうした時代の変化は、自由主義的な改革思想が、社会のなかで次第に受け入れられていくことを意味しているとも言える。それは、『英領インド史』が出版されてから、一年後の一八一九年に、東インド会社の通信審査部長の補佐役の一人としてミルが任命されたことからも看取できる。ミルは、この任命に対して、自分の思想をインドという具体的な場で実現できると考えて心から歓迎した。彼の仕事は、インドにおける急送公文書を起草して、経営の主要な各部門にいる理事諸公の決済に供することであった。依然として、保守主義的、帝国主義的傾向が強かった東インド会社の中で、自由主義的な改革思想を広め、具体的な形でインドの植民地行政に生かすのは容易なことではなかった。しかし、いずれ自分の思想は受け入れられ、インドの植民地行政の中で生かされるであろうと確信していた。J・S・ミルは、父ジェームズ・ミルがインド通信審査部長の補佐役として果たした貢献について、次のように述べている。

「父はその才能と名声と決然たる性格のために、心からインドのよき統治を望む上役諸氏の間に非常に重きをなして、次第にインド人民についての父の本当の考え方を非常な程度にまでその起草する公文書の中に織りこみ、しかも理事会の関門や監督官会議の試練をも、その実効をあまり弱めることなしに通過させることができるようになった。父はそのインド史で、インド統治の真の原理をはじめて堂々と述べたのだったが、父の公文書はその著書の精神を追って、インドをよくし、インド駐在の役人たちにその仕事を理解させるために、かってなかったほどの大きな貢献をした」。[49]

東インド会社の行政官としてのミルの貢献を、J・S・ミルの評価どおりに信用する必要はないにしても、ミルの著した『英領インド史』が、インドの歴史を知り、インドの政策を立案する上でのテクストとして、大英帝国の支配層

や知識人にまで広く読まれ、植民地インドにおいて自由貿易を行なう上での知識として新興産業資本家や自由商人たちにも大きな影響を与えたことは疑えない。では、いったいミルは、インドをどのように分析し、理解していたのであろうか。彼の主著『英領インド史』を手掛りにして考察してみることにする。

『英領インド史』の序文のなかで、ミルは次のような記述している。「インドとその国の言語に対する無知は、自分が哲学的に歴史を書く資格を失わせるものではない。むしろインドについて無知であるがゆえに一層深く理解できる。またインド文化は主要なテクストの翻訳やインドに関する様々な書物の類いを通して、遠くから包括的に理解できる」[50]。こうしたミルの態度は、明らかにベンサムや哲学的急進派が社会を分析するための方法論に基づいていると言ってよい。彼らの採る方法論は、知識は経験から引き出されるものと主張しながらも、一方では、人間性について永久不変の原理を掲げ、その一般原理に立って社会を再構成しようとする。その点では、抽象的で非歴史的な立場を採っている。したがって、ミルのインドに関する知識とは、これまでヨーロッパの知識人によって、経験的に引き出され、蓄積されてきた偏見と誤謬による「知」（インド観）に依拠しているにほかならない。そして、タブラ・ラサの状態に見立てられたインドは、まさに功利主義の一般原理によって再構成されるに、最もふさわしい実験の場として扱われることになる[51]。また一方では、モンテスキューが、十八世紀のフランスを風刺的に攻撃し、批判するために、インドを含む東洋を「専制政体」として用いたように、ミルもまた十九世紀のイギリスに対して同じ目的でインドを用いたと言える[52]。それでは、ミルはインドをどのように理解していたのであろうか。

ミルは、「功利（Utility）」は「文明」を計る尺度であるという立場から、インドの諸制度、文化、民衆の道徳・知性が、いかなる文明の発展段階にあるのかを判断する基準として、「文明」という概念を用いている。ミルによれば、「文明」という概念は、「科学的」、「理性的」、「自由な」という形容詞で言い表わせるもので、具体的には合理的な法律的・政治的諸制度、科学と哲学の成熟、自由の存在、文芸嗜好の開花などが存在する古代ギリシアや近代ヨーロッ

パにのみ当てはまるものであった。したがって、ミルの「文明」という基準に照らせば、インドは、まさに中世ヨーロッパの時代（「暗黒と野蛮な時代」）にあたり、しかもその中世ヨーロッパ社会よりも、農耕の技術や芸術の水準、民衆の道徳や知性の面において一層劣っていると見られていた。インド社会は、ミルの目には、「専制政体（*despotism*）」と「迷信（*superstition*）」が支配する遅れた社会の初期段階の典型例に映った。[53] それゆえに、いまだ文明が停滞した状態にあるインド社会を、自由主義的思想によって改革すべきであるという情熱と信念にミルは燃えていた。こうしたミルのインド社会に対する認識は、『英領インド史』の中で、幾度もベルニエやモンテスキュー、ダウーの著作を引用していることからも窺えるように、明らかに彼らのインド観をそのまま継承し、踏襲していることが分かる。[54]

植民地化には、まず最初に、商業的なものであれ、宗教的、軍事的、文化的なものであれ、利害というものがつきまとうものである。ミルにとって、植民地化する利害とは何であったのであろうか。「植民地は、いかなる経済的利益も生まない」とする彼の主張にも表れているいるように、植民地化による自由な市場の開放と拡張を求める自由主義者たちには否定的であった。なぜなら、彼が自由な外国貿易を擁護したのは、外国貿易が、国富を「創造」するからではない。ただ、国際分業の原理にもとづいて、労働の生産力を高め、資本蓄積を促進することによって、国富を「増大」するからにすぎない。すなわち、外国貿易を営む商業資本は、産業資本の「ただの補助物にすぎない」という重要な限定条件のもとで、擁護されているからである。[55] では、ミルの植民地の利害とは、何であったのであろうか。想像するに、おそらく文化的なもの（思想）であったのではなかろうか。もしそうであるとすれば、明らかに植民地支配の持つ重要な諸側面を見落としていると言える。

植民地の目的を、ミルはどのように考えていたのであろうか。エンサイクロペディア・ブリタニカ（*Encyclopeadia Britannica*, 1817）の増補版に、'*Essay on Colonies*' という論文を掲載している。そのなかで、ミルは、植民地の目的を次のように論じている。「植民地は支配エリートの権力とパトロネージュの源であり、支配エリートの地位を存続さ

せるために利用されている。植民地は帝国主義国家としての大英帝国を正当化するために、インドの経済的豊かさという神話を作り上げる貴族階級の権力を支えている」[56]。つまり、ミルは、植民地主義によって、イギリスのアンシャン・レジームと貴族階級の地位が、強化されていると感じていた。その典型的な例として、ベンガル総督コーンウォーリズ（Charls Cornwallis 1738-1805、在職一七八六～九七年）が、一七九三年にベンガル管区に導入したザミーンダーリー制度を挙げ、これこそ、イギリスの支配エリートが、インドにおいて、最も影響力ある政策イデオロギーの表象であると見なしていた[57]。

ミルの『英領インド史』が、たとえ功利主義や自由主義の改革思想によって、インド社会、あるいは、イギリス社会を改革しようとする啓蒙書であったとして、そこで描かれ扱われるインド社会は、これまでヨーロッパ人が描き、抽象化したインド観と変わるところがない。また、植民地支配についても、彼の経済理論や思想の視点からしか認識されておらず、植民地支配のもつ様々な利害が引き起こす問題については考慮されてはいない。その意味では、彼の思想も、時代の寵児であり、重要な制約と限界をそのなかに含んでいたと言える。さらに、ベイリーが強調しているように、彼の自由主義的な改革思想は、イギリス領インドにおいて限られた影響力しかなかったのかもしれない。確かに、インドにおける法の成文化の過程で、あるいは、法や行政府の改革において、いかほどの実効性があったのかは疑問である[58]。しかし、ミルの思想が、J・S・ミルの言を借りるまでもなく、イギリスのインド植民地行政官に大きな影響を与えたことは明らかである。彼の思想の影響が、インドの植民地行政のなかに、どのように現われているのかを知るためには、十九世紀初頭から十九世紀半ばにかけて、インド総督たちの思想と政策について十分に考察する必要があるように思われる。

(三) マンスチュアート・エルフィンストン

インドの古代から中世までを著した歴史書、『インド史』(*The History of India*, 1841)は、マンスチュアート・エルフィンストン(Mountstuart Elphinstone 1779-1859)の三十年にもおよぶインド滞在の経験と豊富な文献資料によって見事に編み出されている。*The Quarterly Review* をはじめとする様々な雑誌の中で、あらゆる批評家がエルフィンストンの『インド史』に賛辞を送った。[59] *The Quarterly Review* の批評では、多くの教養ある人々のなかに、今だに根強く残っている古代インドへの混乱、偏見、無関心を、この歴史書が一掃してくれるであろうという期待をこめて、高い評価が与えられた。エルフィンストンの『インド史』が、称賛される背景には、イギリス人のインドに関する無関心、知識の欠如と誤謬に対する批判と反省が込められていたと言える。マコーレー(Thomas Babington,1st Baron Macaulay, 1800-59)が、クライヴ(Robert Clive, 1725-74)に関するエッセイの最初の方で記述しているように、イギリス人の多くが、クライヴのインドでの成功よりもコルテス(Hernan Cortes, 1485-1547)のメキシコ(アステカ)の征服の方に大きな関心を寄せていた。[60] つまり、十六世紀、スペイン人によってアメリカ大陸が征服され、メキシコや南米でつぎつぎと銀山が発見されると、銀は金と同様、多くの国の基本貨幣として用いられていただけに、メキシコは垂涎の的となっていた。したがって、十九世紀半ばに至っても、依然として、イギリスの一部の知識人や大衆にとって、包括的に纏められたインド史など興味の対象にはなかった。インドの歴史は、あくまでも冒険好きな時代風潮の延長線上にある物語にすぎなかった。

エルフィンストンは、一七九五年、書記として東インド会社に勤務してから、一八二七年、ボンベイ知事を引退するまで、三十年あまりインドに滞在している。一八〇〇年、フォート・ウィリアム・カレッジ(Fort William College)で、東インド会社の官吏として、教育を受けている。このカレッジは、一八〇〇年、当時のインド総督、ウェルズリ

ー卿（Richard Colley Wellesley、在職一七九七～一八〇五年）の発案によって、カルカッタに設立されもので、東インド会社の官吏養成学校として建てれ、インド亜大陸の諸言語に精通した官吏の育成を目的としていた。そしてまた、同時に、フランスの革命思想が、インドに波及するのを防ぐことを目的としていた。[61] このカレッジで訓練を受けたあと、ウェルズリー卿によって、傑出した資質を高く評価されたエルフィンストンは、プーナやナグプールのインド駐在事務官に任命され、そこで七年間を過ごした。一八〇九～一〇年の間、ベンガル総督、ミントー卿（在職一八〇七～一三年）の命によって、エルフィンストンはアフガン族の中心地カブールへ外交使節団の長として派遣された。その後、彼はプーナのイギリス総督代理に任命された。一八一八年、第三次マラーターによって、ペーシュワー（*the Peshwā*）から獲得した領土を平定する任に受けてから、一年後、その領土がボンベイ管区に編成されたとき、彼はボンベイ知事に就任した。[62]

エルフィンストンは、ムガル帝国の支配の急速な分裂と衰退によって、台頭してきた地方の諸勢力との政治的交渉をする必要から、否応なく現地の言葉を習得し、インド社会的・政治的諸制度に精通せざるをえない官職に就いていた。しかしながら、こうした三〇年にも及ぶインド滞在の経験は、むしろ、エルフィンストンにインドの政治や歴史に興味を抱かせ、のちに『インド史』を著すさいに、大いに役立ったと言える。エルフィンストンは、インド歴史家として、イギリスのヒストリオグラフィ（British historiography）の二つの伝統を継承している。一つは、オリエンタリスト、ウイリアム・ジョーンズの保守主義的伝統であり、もう一つは、ジェームズ・ミルの功利主義的・自由主義的伝統である。[63] こうしたヒストリオグラフィの二つの伝統に影響を受けながら、インドの歴史を解き明かそうとした。インド滞在の初期の頃には、ウェルズリー卿の影響もあって、保守主義的な観点から、インドを考察していたが、後半になると、経験と知識が増すにつれ、次第に功利主義の思想へと関心が傾いていった。[64]

エルフィンストンは、インドの歴史を古代（「ヒンドゥー期」）と中世（「ムスリム期」）という二つの時代区分を設

定し、そこに焦点をあて、インドの歴史そのものを叙述しようとした。なぜなら、これまで出版されているミルの『英領インド史』もグレイグ（Rev. G. R. Gleig）の『インドの英帝国史』（*History of British Empire in India*, 1830）も、インドの歴史というよりは、むしろインドにおけるヨーロッパ人の歴史を描いているすぎないとエルフィンストンは考えていたからである。[65] こうして著されたエルフィンストンの『インド史』は、これまでインドの古代や中世に無関心だった一般読者にも、明快で簡潔なインド史の概要を理解させる上で、大きな手助けとなった。

エルフィンストンの時代には、古代インドに関する書物は、すでに多くのテキストが出版され、翻訳もされていた。カーリダーサーの劇『シャクンタラー』（*Sacontala*, transl. 1789）や『マヌ法典』（*Manu's Code*, transl. 1796）などのテキストと翻訳が、ジョーンズによって、出版されていたし、またウィルキンズ（C. Wilkins, 1749-1836）によって、ヒンドゥー教の重要な聖典『バガヴァッドギーター』（*Bhagwat Gita*, transl. 1784）の英訳も発表されていた。したがって、エルフィンストンは、古代インドの偉大さについて、ある程度の認識を持っていた。しかし、『英領インド史』を読んで、ミルのヒンドゥーやヒンドゥー文明についての解釈には、誤謬と偽りが混在しているのを経験と知識によって気づくと、『シャクンタラー』や『マヌ法典』を読み直し、事実に近い古代インドを描こうとした。[66] 古代インド（「ヒンドゥー期」）は、エルフィンストンによれば、歴史のはじまりから進歩した文明をもっており、学問には敬意が払われ、信心深さが民衆の隅々まで行き渡っており、生活の技術も単純ではあるが粗野なものではなかった。中世インド（「ムスリム期」）においては、アクバルの偉大さを称賛し、彼の築き上げた軍事・官僚機構や宗教的寛容さが、いかに帝国にとって有益であったかを論述した。

しかしながら、エルフィンストンには、インドの歴史を明らかにする目的以外に、もう一つの目的が潜んでいた。それは、インドの歴史を著すことによって、古代ギリシアと中世ヨーロッパを解明することであった。古代インドの文明と古代ギリシアの文明を比較するために、また古代インド文明の衰退と古代ギリシア文明の衰退とを比較するた

めに、ヒンドゥー人を研究した。[67] またエルフィンストンは、中世インド（「ムスリム期」）は、中世ヨーロッパの解明に繋がるものと考えていたので、この中世インドの歴史を著すことで、中世キリスト教世界を具体的に再現しようとした。こうした見方は、ミルがインド社会を、「専制政体」と「迷信」が支配する社会、つまり中世ヨーロッパ社会（「暗黒と野蛮な時代」）と措定した方法と合致するものだと言える。[68] 古代インド文明の衰退を、ヒンドゥー人の従順で、男らしさの欠落した性格や、進歩的な改良に対するいかなる原理の不在に求めた。さらに、昔からの道徳や一神教は、虚構の神々の例にならって、すなわちある宗派の宗教的儀式に許される放蕩によって、次第に蝕まれていった。[69] 他方、中世インドにおいて、アクバルの偉大さや、彼の築き上げた軍事・官僚機構や宗教上の寛容さを称賛しながらも、その一方では、社会は停滞しており、いかなる進歩の原理も働いてはいないとした。そして、エルフィンストンは、こうした停滞から脱却するためには、イギリスの「自由」をインド社会に確立する必要があると感じていた。なぜなら、個人が自由の状態であるとき、進歩が起こり、おのずと二・三世代のうちに社会は変わっていくと信じていたからである。[70] 言い換えれば、インドの諸民族に対するロマン主義者の共感から、近い将来、インドの民衆が、ヨーロッパ政体に存する自由の原理に基づいて、自らの政府を築き上げることができたとき、イギリス支配の平和的役割は終わると考えていた。いずれにしろ、エルフィンストンのインド観もまた、ベルニエ、モンテスキュー、ダウ、ミルたちによって、歴史的にステレオタイプ化されたインド像の上に構築されたものであった。彼の『インド史』は、将来のインド植民地行政官のテクストとして、また一部知識人や一般読者の啓蒙書として、大いに貢献したと言える。それはまた、インド文明に対するいくらかの尊敬と、インドにおける穏健な西洋化の正当化にそれなりの役割を果たしたと言える。

四　結びにかえて

十七世紀末のフランスでは、タヴァルニエやシャルダン、ベルニエなどの『旅行記』が、一つのジャンルを形成し、一世を風靡したとも言えるほど大流行した時代であった。なかでも、ベルニエの『旅行記』は、版を重ねる度に評判を呼び、フランス人のオリエントへの夢を掻き立てる導火線的な役割を果たした。その影響のほどは、ヴォルテールやモンテスキュー、モリエールといったフランスの思想家や文学者たちの作品のなかにも、はっきりと窺うことができる。とりわけ、モンテスキューの主著『法の精神』には、ベルニエをはじめてし、タヴァルニエやシャルダンの『旅行記』が、幾度となく引用されている。

ベルニエの『旅行記』に端を発し、モンテスキューなどの思想家によって、創り上げられたインド像、あるいは、インド観といったものは、それらが英訳されることによって、十八世紀後半以後の「インド史」を描いたイギリスの歴史家たちにも継承されていくことになる。十八世紀後半、イギリスがインドをめぐる植民地争いでフランスに勝利し、インド亜大陸における植民地支配の実権を握ることになると、それを意識してイギリスの歴史家たちは、インドの植民地政策する上での参考書（テクスト）として、あるいは啓蒙書として、インドの歴史を描こうとした。アレクサンダー・ダウは、ペルシア語の史料、『フィリスタの歴史』を翻訳し、自らの歴史観をそのなかに織り込みながら、インドの歴史を叙述しようとした。ダウの『ヒンドスタン史』には、明らかにインドにおけるイギリスの植民地政策への提言が含意されていた。また、ジェームズ・ミルの『英領インド史』は、功利主義や自由主義の改革思想を、インドのなかに試みようとする壮大な実験であり、もう一方では、バークやウィリアム・ジョーンズなどの保守主義者への批判の書でもあった。そして、エルフィンストンの『インド史』は、イギリスのヒストリオグラフィの二つの伝統、ミルの功利主義思想とジョーンズの保守主義思想の影響を受けながら、それを批判的に検討することによって、

インドの古代と中世の歴史を明らかにしようとした。いずれの歴史家にしろ、彼らのインド像、あるいは、インド観は、ベルニエやモンテスキューによって、ステレオタイプ化されたものをベースにして創り上げられたものであった。言い換えれば、フランス知識人大旅行家ベルニエの『旅行記』などを参考にし、哲学者モンテスキューが定式化した「専制政体」としてのインドは、次第に一般化され、ステレオタイプ化されて、イギリスの歴史家たちのなかに定着していったと言える。

しかしながら、イギリスの歴史家たちが描いた「インドの歴史」が、植民地支配にかかわったイギリスの支配層に対して、いかほどの啓蒙的役割を果たしたか、あるいは植民地政策に直接どれほどの影響を与えたかについて、正確に論証することは、おそらく困難であろうと思われる。ただ言えることは、十八世紀以降のイギリスにおいて、インドに関する知識が増大し、流布するようになったとはいえ、まだインドは遠い異国として、不確実で不鮮明な側面を十分内包していた。それ故に、イギリスの政治家、政策立案者、植民地行政官、知識人、商人といった人たちは、インドの社会に間近に遭遇する状況に置かれると、まず彼らは、インドに関する書物（歴史書）の図式的な権威によりかかって、インドを判断するということである。

このような状況から生み出される読者と著者との関係について、サイードは次のように述べている。「弁証法によって、読んだ書物が読者の現実の経験を規定すると、今度はその事実が書物の著者の方に影響を与え、読者の経験によってあらかじめ規定されてしまった主題を著者に採用させることになるのである」。さらに、彼は「このような状況の中で生まれたテクストは、専門的著作と呼ばれ、場合によっては、学者や研究機関や政府がそれにお墨付きを与えることもある。……もっとも重要なことは、こうしたテクストが単に知識だけではなく、そのテクストが叙述しているかに見える当の現実をさえも想像することができるという点である。やがて、こうした知識と現実とは、一種の伝統を、つまりミッシェル・フーコーが言説と呼ぶところのものを生み出すことになる」と述べている。[71] 要するに、イギ

リスの支配層のインドについての知識も、多かれ少なかれ、西洋中心のオリエンタリズムの伝統のなかで書かれた書物、しかもオリエンタリズムの紋切型の観念の図書館におさめられた書物に由来するということである。たとえベイリーが、「改革」の思想は、イギリス領インドには限られた影響力しかなかったと力説していても、紋切型の観念として、一般化されたインド観は、継承され、繰り返されるうちに、一つの権威を得、動かしがたい事実として、イギリスの政治家、知識人、植民地行政官、商人などを支配していたのは間違いないと思う。

それでは、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、イギリスのインド支配（初期の帝国主義）は、どのように行なわれたのか。言い換えれば、イギリス人の価値観念を押しつけて行なわれたのか、それとも、現地の法体系や生活様式によって支配するという、きわめて現実的なやり方で行なわれたのか。おそらく、初期の帝国主義は、自由主義と保守主義という二つの思想の拮抗のなかで、展開されたと言えるのではないかと思う。これを明らかにするためには、少なくとも、イギリス本国における、当時支配的イデオロギーであった自由主義と保守主義の思想の流れをおさえ、その支配的イデオロギーと、インドで活躍したイギリスの植民地行政官、ジョーンズ（カルカッタの上級裁判所の裁判官）、コーンウォリス（ベンガル総督）、ベンティック（インド総督）、ダルハウジー（インド総督）などとの関係を考察する必要があろう。この件について、紙幅の関係上、触れることができなかったが、いずれ稿をあらためて論じたいと思う。

(1) Ballhatchet, K. *Social Pilicy and Social Change in Western India*, London, 1957. Stokes, K. *The English Utilitarian and India*, Oxford, 1963.また Mukherjee, S. N.の *Sir William Johns* (Cambridge University Press, 1968)にもその傾向が窺われる。

(2) S. N. Mukherjee, *Sir William Jones: A Study in Enghteenth-century British Attitudes to India*, Cambridge U. P., 1968, p.8.

(3) フォースターは、イギリスのインド史研究家で、東インド会社関係の古記録を編纂、刊行し、またその史約研究を発表している。『インド初期旅行記』には、Ralph Fitch (1585-91), John Mildenhall (1599-1606), William Hawkins (1608-13), William Finch (1608-11), Nicholas Withington (1612-16), Thomas Coryat (1612-17) and Edward Terry (1616-19)の七人のイギリス人旅行家の話が収録されている。

(4) Forster, Sir William. *Early Travels in India 1583-1619*, Oxford, 1921, p.308.

(5) *Ibid.*, p.218.

(6). *Ibid.*, p.248.

(7) *Ibid.*, p.315.

(8) Bernier, F. *Travels in the Mogul Empire* (transl. A. Constable), London, 1913, p.xx.ベルニエはガッサンディの哲学について、『ガッサンディの哲学概論』(*Abrégé de la Philosophie de Gassandi*, 7 vols., 1678) を著している。ベルニエの生涯と著作に関しては、小名泰之「フランソワ＝ベルニエ―その生涯と著作―」『青山史学』第六号、一九八〇年、「フランソワ＝ベルニエの活動―一六五〇年代前半の事件を中心として―」『史友』第一三号、一九八一年、「フランソワ＝ベルニエの『ムガル帝国旅行記』をめぐって」『青山史学』第十二号、一九九〇年。赤木昭三「解説　知識人フランソワ・ベルニエ」フランソワ・ベルニエ（関美奈子・倉田信子訳）『ムガル帝国誌』、岩波書店、一九九三年、四五五～四七八頁などを参照。

(9) ル＝グーについては、小名泰之「フランソワ＝ル＝グーの手紙をめぐって」『青山史学』第八号、一九八四年、「一七世紀インドにおけるフランソワ＝ル＝グーの活動」『三上次男博士喜寿記念論文集　歴史編』平凡社、一九八五年を参照。

(10) ベルニエのインド滞在については、小名氏の前掲論文を参照。

(11) ベルニエの著作目録については、Bernier, F. *ibid.*, pp.xxv-xlii を参照。

(12) Voitaire, *Le siècle de Louis XIV*, Paris, Librairie Garnier Frères, vol. II, p.234.（ヴォルテール、丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』、岩波文庫、一九五八年、四巻、一七〇参照）

(13) Smith, Adam, *The Wealth of Nations*, 2nd ed., vol.II, 1920, pp.221-222.

(14) マルクスはエンゲルスに宛てた手紙の中で、ベルニエの『旅行記』に触れ、次のように述べている。「ベルニエは、正当に、オリエントのすべての現象についての基礎形態を―彼はトルコやペルシアやヒンドスタンについて語っている―土地の私有が存在しな

い、ということのうちに見いだしている」。これに対するマルクスへの返事の中で、エンゲルスは次のように述べている。「土地所有が存在しないということは、じっさい、オリエント全体への鍵だ。政治史でも宗教史でも眼目はそこにある。だが、オリエントの人々が土地所有に、封建的なそれにさえ、かかわりをもたないのは、いったいどうしてだろうか？　思うに、それは、主として、地勢とも結びついている気候のせいだ。……」。『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店、二八巻、一九七一年、二〇七～二一一頁参照。ここでエンゲルスが述べている考えをマルクスは彼の論説『イギリスのインド支配』（マルクス＝エンゲルス全集、第九巻、一二七～一三三頁）のなかで利用した。

(15) Edward A. Driscoll, 'The influence of Gassendi on Lock's hedonism', *International philosophical quarterly*, 12(1972), 87-110. ロックの医学関係のノートのなかには、ベルニエの師、ガッサンディに関する記述も見られ、ガッサンディの原子論的感覚論への傾斜を窺わせる。『世界の名著　ロック・ヒューム』、中央公論社、一九八六年、一二頁参照。

(16) Bernier, *ibid.*, p.238.

(17) *Ibid.*, p.212.

(18) *Ibid.*, p.227, 238.

(19) Montesquieu, *De l'Esprit des Lois*, 1748 (reprint. 2vols, 1979), vol.1, p.131.（野田良之他訳、『法の精神』、岩波書店、一九九三年、上巻五一頁参照）

(20) Ibid., pp.150-151.（邦訳、八二頁参照）

(21) Voltaire, *Fragments sur l' Inde*, Paris, 1763, pp.10-11.

(22) 『統治論』「世界の名著　ロック・ヒューム」、中央公論社、一九八二年、三一八～三四六頁参照。ただし、ロックは、そのなかで、「専制」を'*despotism*'ではなく、'*tyranny*'という用語を使っている。Locke, *Two Treatises of Government*, ed., Peter Laslett, 1988, p.398.

(23) モンテスキューは、すでに『ペルシア人の手紙』（*Lettres Persanes*, 1721）なかで、『法の精神』で展開される東洋専制主義論の萌芽を見る」ことができる。œuvres complètes de Montesquieu, *Lettres Persanes*, Aux editionsdu Seuil, 1964, p.80.（『世界の名著　モンテスキュー』、中央公論社、一九八二年、一六二～六三頁参照）

(24) *Ibid.*, pp.150-153.（邦訳、八一～八六頁、九五、一七五頁参照）

(25) *Ibid.*, p.187, 190.（邦訳、一三八、一四三頁参照）
(26) *Ibid.*, p.260, 268.（邦訳、二五〇、二五六頁参照）
(27) *Ibid.*, pp.377-379.（邦訳、中巻三三〜三六頁参照）
(28) Bernier, *ibid.*, p.227, 238.
(29) Montesquieu, *ibid.*, p.187.（邦訳、上巻一三八頁参照）
(30) *Ibid.*, vol.2, p.159.（邦訳、下巻五五頁参照）
(31) *Ibid.*, p.157.（邦訳、五二頁参照）
(32) *Ibid.*, p.149.（邦訳、四一頁参照）
(33) *Ibid.*, p.147.（邦訳、三八頁参照）
(34) *Ibid.*, pp.141-142.（邦訳、三〇〜三二頁参照）
(35) モンテスキューは、『ペルシア人の手紙』(*Lettres Persanes*, 1721) のなかで、ペルシアやインドに関して叙述するとき、タヴェルニエ (J.-B. Tavernier 1605-89) の著書『トルコ、ペルシア、インドに行なった六回の旅行』(*Les Six Voyages de Jean-Baptiste Tavernier, Chevalier Baron d'Aubonne, Qu'il a Fait en Turquie, en Perse, et aux Inides, Pendant l'espace de quarante ans*, 1676) やシャルダン (Jean Chardin, 1643-1713) の『ペルシアと東洋インド旅行記』(*Voyage en Perse et aux Indes Orientales*, 1686) を参考にしていたと言われている。また、『法の精神』のなかでインドについての記述は、その多くをペルニエの『旅行記』から引用されており、その他にも、『東インド会社関係旅行記集』(*Recueil des voyages qui ont servi à l'établissement de la compagnie des Indes*) や『イエズス会士書簡集』(*Lettres édifiantes*) などからも多く援用されている。シャルダンについては、『ペルシャ旅行記』の他にも、『スレイマン三世の戴冠式の話』(*Recit du couronnment du roi de Perse Solimun* III [1671]) という書物を著している。『ペルシャ旅行記』は、英訳され、『ジョン・シャルダンのペルシャ旅行記』(*Sir John Chardain's Travels in India*, 1927) や『ペルシャ旅行記』(*Travels in India*, 1988) というタイトルですでに出版されている。
(36) Voltaire, *ibid.*, pp.10-47.
(37) デルベロの『東洋事典』。*Bibliothèque Orientale, ou Dictinnaire universel, contenant généralement tout ce qui regard la connassance des peuples de l'Orient*, Paris, 1697, La Haye, 1777-82 の四巻本を参照。この事典は、東洋に関する用語が、アルフ

アベット順にまとめられている。インドに関する記述は、少ないが、エルフィンストンは、『インド史』(*History of India*, repr., New Delhi, 1988, vol.1, pp.324-371)のなかで、人名を説明するのに、この『東洋事典』を使っている。Fraser, James, *The History of Nadir Shah*, London, 1742.フレーザーは、この著書のなかの最初の章、'*A short History of the Hindostan Emperors of the Moghol Race, beginning with Temur*' (pp.1-62)で、インド皇帝の小史を扱っている。

(38) ジョン・ブリッグズ(John Briggs)は、『フィリスタの歴史』を英訳し直して、『インドにおけるムスリム勢力の勃興史』(*History of the Rise of the Mahomedan Power in India*, 4vols., London, 1829)を著した。彼はその序文のなかで、人名や地名の混乱、地理の知識の曖昧さなどを挙げて、ダウのフィリシュタのテクストの理解が不十分であるとして、彼の『ヒンドスタン史』の信憑性を疑った。Grewal, J.S., *Muslim Rule in India*, Oxford University Press, 1970, pp.6-22.

(39) ダウの『ヒンドスタン史』の第二版を出版した編集者の前書きには、ダウは、フィリシュタの歴史書ほかに、Abul Fadi's *Aini Akbari*, Matimad Khan's *Jehangirnama*, Mohd Shuffia's *Miratul-Waridat*, Mirza Kasim's *Shahjehan Nama*, Rose Nama & Alingir Nama and Nazir Bukhtiar's *Mirat Alam* などのペルシア語の史料からもその多くを参考にしたと記述されている。フィリスタの経歴については、ダウスン(Elliot, Dowson)の『インド史』(*History of India*, 8vols, 1867-77, 6vol., pp.532-569)を参照。

(40) Dow, Alexander, *The History of Hindostan*, vol. I, p.i.

(41) *Ibid.*, vol.III, pp.vii-ix.

(42) *Ibid.*, p.viii.

(43) *Ibid.*, p.xxii.

(44) *Ibid.*, p.xxiii.

(45) *Ibid.*, pp.xxviii-xxix, xliii-li.

(46) 経済学に関するミルの著作には、穀物の輸出奨励金や輸入制限に反対し、自由貿易を主張した『穀物輸出奨励金の不得策に関する一論』(*An Essay on the Impolicy of a Bounty on the Exportation of Grain and on the Principles which ought to Regulate the Commerce of Grain*, 1804)、本稿でもとりあげた『商業擁護論』(*Commerce Defended*, 1808)、『経済学要論』(*Elements of Political Economy*, 1821〈渡辺輝雄訳『経済学綱要』昭和二三年刊〉)、哲学に関しては、ハートレー(David Hartley)の「観念連合心理学」

の影響を強く受けて、ベンサム主義の心理学的側面を解明するために、『人間精神の諸現象の分析』(*Analysis of Phenomena of the Human Mind*, 1828) という著作を書いている。

(47) J. S. Mill, *Autobiography*, ed., John M. Robson. (Penguin Books, 1989), p.40.（朱牟田夏雄訳『ミル自伝』、岩波書店、一九九三年、三〇～三一頁参照）

(48) Mill, James, *Commerce Defended*, 1808, 2nd ed., pp.13-14, pp.43-44, p.50, pp.77-78, p.106, p.111.（岡茂男訳『商業擁護論』、未来社、一九六五年、一八～一九頁、六〇～六一頁、九〇～九二頁、一二四頁、一二九～一三〇頁、二三九頁参照）

(49) J. S. Mill, *ibid*., pp.41-42.（前掲書、三二頁参照）

(50) Mill, James, *The History of British India*, 6vols., 3rd ed., London, 1826, i, v-iv. *Edinburgh Review*, xxxi (Dec., 1818), 4.

(51) ハートレーの〈観念連合心理学〉に強い影響を受けていたミルは、「人間の精神は、生まれたときはタブラ・ラサである。人間の個と全体の幸福を促進するために、最も計画された観念を教えこむことによって、個の精神は形づけられる」と信じていた。タブラ・ラサの状態に想定されたインドは、まさにミルの描く社会モデルを実現するにふさわしい実験の場であったと言える。Mill, *The History of British India*, 1858, 2, p.105.

(52) Mazlish, Bruce, *James and John Stuart Mill*, New York, 1986, pp.120-121.

(53) Mill, James, *ibid*., ii, p.66, 70-72, 186-7, Bearce, George D., *British Attitudes towards India 1784-1858*, Oxford University Press, 1961, p.71, Mazlish, ibid., p.120. Majeed, Javed, *Ungoverned Imaings*, 1992, p.136.

(54) Mill, James, *The History of British India*, 3vols., New Delhi, 1990, p.153, 213, 231, 232, 240, 497, 584, 687.

(55) Mill, James, *Commerce Defended*, p.67, pp.108-109, 115-116.（前掲書、八〇頁、一一五～一一六頁、一三四～一三五頁、二四〇～二四一頁参照）。のちに、ミルは、*Elements of Political Economy* のなかでも、このことについて触れている。

(56) Mill, James, '*The Article Colony, reprinted from the Supplement to the Encyclopeadia Britannica*', n.d., pp.31-3.

(57) J. Majeed は、Ungoverned Imagings のなかで、ウィリアム・ジョーンズのインド法の要約集は、Cornwallis のザミーンダーリー制度を補足するものとして、またジョーンズを保守主義者として最初に位置づけたのは、ミルであると述べている。J. Majeed, *Ungoverned Imagings*, 1992, pp.3-4, 'James Mill's 'The History of British India' and Utilitarianism as a Retoric of Reform' *Modern Asian Studies*, 24, 2(1990), pp.210-211.

(58) C. A. Bayly, *Indian Society and the Making of the British Empire*, The New Cambridge History of India II, 1, 1988, p.202.

(59) *The Quarterly Review*, Vol. LXV III, 1841, pp.377-413. J. S. Grewal, *ibid*., p.130.

(60) T. B. Macaulay, *The Works of Lord Macaulay : Essays and Biographies* (Albanyed n., 12vols., London, 1898), ix, pp.186-8.

(61) J. Majeed, *James Mill's 'The History of British India' and Utilitarianism as a Retoric of Reform*, pp.210-11.

(62) エルフィンストンの経歴については、Kaye, Sir John William, *Lives of Indian Officers*, London, 1883, pp,335-458 に詳細に記述されている。

(63) Beance, George D.*ibid*., p.264.

(64) Ballhatchet, *ibid*., pp.2-4, 35-37,

(65) J. S. Grewal, *ibid*., p.134.

(66) *Ibid*., pp.133-34.

(67) *Ibid*., p.134.

(68) *Ibid*., pp.165-66.

(69) Elphinstone, Mounstuart, *History of India*, 1866, p.48.

(70) *Ibid*., p.107.

(71) Saiid, Edward W.*L'Orientalism*, 1980, pp.112-114.（今沢紀子訳『オリエンタリズム』、平凡社、一九八六年、九四～九六頁参照）